

WUWHS 2016 参加報告

慶應義塾大学医学部形成外科学教室 貴志 和生

第5回 WUWHS (World Union of Wound Healing Societies) は、本年9月25日～29日、Marco Romanelli 会長の下、イタリアのフィレンツェで開催された。メインテーマは”One vision, One mission”。会場は、フィレンツェの中心部に建てられた、バツ要塞と呼ばれる、城壁で囲まれた巨大なイベント会場で行われた。中世の城壁に建てられた入り口は、荘厳な雰囲気であった。

初日は、各国の様々な創傷治癒関係の団体のセッションに引き続き、オープニングセレモニーが開催された。フィレンツェの伝統的な行進のセレモニーが供覧され、続いてガーデンパーティーが開催された。広々とした庭であったが、それでも多くの参加者でごった返していた。この時期のフィレンツェは、気候が安定しているようで、学会期間中は、ずっと快晴であった。日中は日のあたる場所では暑いぐらいで、陽射しがきつく、非常に乾燥していた。日本からも、日本創傷治癒学会員を含め、非常に多くの参加者があった。

会場で目を引いたのが、メインの巨大なホールに入ると、1階の巨大フロアが、すべて企業展示で占められていたことであった。展示ブースは優に100を超え、それぞれが大きなスペースで、また着ぐるみあり、アイスクリームの配布あり、果ては、バーまでが設置されていて、連日お祭り騒ぎであった。さすが、イタリア。ただ、展示している企業は日本でなじみのあるものは少なく、逆にヨーロッパでの、創傷治癒関係の企業の多さに圧倒された。

発表会場は、2階と地下、本館の隣にあるホールなど10か所に分かれており、ラファエロ、ミケランジェロなど、フィレンツェに関連する有名な画家の名前が付けられたホールで行われた。フィレンツェはご存知の通り、芸術の街であり、多くの美術館が集中しており、食事もすこぶる美味しい。学会場は素晴らしく、参加者も多いはずなのだが、実際にセッション会場は、ほかの学会に比べると参加者が決して多くないのは、仕方のないことか。また、演題を登録しておきながら、発表に現れない人が多く、予定時間の半分ぐらいで終わってしまうセッションもあった。内容であるが、難治性潰瘍、足病などの臨床的な内容のものが大半を占め、研究分野は少なかった。

日本創傷治癒学会員評議員の秋田定伯先生が、今回の学会の終了時まで WUWHS の president であり、今回の大会長の Marco 先生とともに、学会全体をリードしていた。学会期間中に次の開催地を決める選挙があり、4年後は UAE のアブダビに決定した。



NEWS
LETTER

日本創傷治癒学会

2016.11
No.96

●日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学

医学部形成外科学教室内

tel.03-3351-4774

fax.03-3352-1054

e-mail: info@jswh.com

URL : <http://www.jswh.com>

5th World Union Wound Healing Societiesに参加して

金沢大学新学術創成研究機構 須釜 淳子

5th World Union Wound Healing Societies が9月25～29日、Marco Romanelli 大会長(ピザ大学皮膚科学教授)のもと、バツ要塞内に設けられた会議場(フィレンツェ イタリア)にて開催されました。第5回大会のテーマを“One Vision, One Mission”とし、シンポジウム、ワークショップ、一般演題、企業展示などの多彩な企画が催されました。また、この大会に合わせて2種類のコンセンサスドキュメント、4種類のポジションドキュメント、そして1種類のクリニカルレポートが公開されました。具体的には、コンセンサスドキュメントとして、褥瘡予防における創傷被覆材の役割、手術創の管理：局所陰圧閉鎖療法に関する見解、ポジションドキュメントとして、糖尿病性下肢潰瘍の局所管理、バイオフィルムの管理、化膿性汗腺炎の見解、創傷ケア進化：創傷アセスメントのトライアングル、クリニカルレポートとして、難治性創傷のイノベーションでした。これらはいずれも大会 HP からダウンロードできます。

今回は、シンポジウム“創傷治癒に関するセンサとシステム”について報告します。創傷管理をする医療従事者にとって、創傷の状態を観察し潜在的な治癒遅延因子を予測し、リスクを回避する治療やケアをその場で判断実施できる技術は非常に有用です。本シンポジウムではそれに関連する技術やシステムについて5名のシンポジストから発表がありました。Francesco 氏(イタリア)は、ディスプレイセンサで創底のpHと温度をモニタリングして早期に感染徴候を検知する仕組みについて報告しました。Errachid 氏(フランス)は、創の滲出液中のTNF- α 量を計測する高感度バイオセンサについて報告しました。Wallace 氏(オーストラリア)は創傷管理における3D プリンティングプログラムの可能性について報告しました。Salvo 氏(イタリア)は、

SWAN-iCARE プロジェクトについて報告しました。これはウェアラブルな陰圧装置を用い、局所治療のみでなく、その機器にpHやMMPs等のモニタリングセンサを組み合わせることで創傷治癒過程を非侵襲的に遠隔モニタリングし、専門家が早期に介入するというものでした。Ruck 氏(イギリス)は、科学技術によってもたらされる恩恵とヘルスケアとの関係について発表しました。発表があった技術のいくつかは、既に企業展示会場でも直接触れることができ、海外における創傷管理分野技術の目覚ましい発展を実感しました。

会期中に2020年開催地決定投票が行われアブダビ(アラブ首長国連邦)となりました。

WRRに会員の論文が掲載されました

会員の論文がWound Repair and RegenerationのVolume24 Issue No.5に掲載されました。論文名、会員の著者は下記の通りです。

投稿規程に関しましては、Wiley Online Libraryの本ジャーナルホームページの右側にあるナビゲーションバーより、〈JOURNAL MENU〉⇒〈FOR CONTRIBUTORS〉⇒〈Author Guidelines〉をクリックいただくか、以下のURL先を直接検索窓にコピー&ペーストして入手ください。

[http://onlinelibrary.wiley.com/journal/10.1111/\(ISSN\)1524-475X/homepage/ForAuthors.html](http://onlinelibrary.wiley.com/journal/10.1111/(ISSN)1524-475X/homepage/ForAuthors.html)

なお、投稿方法については、円滑な審査を行うために、2004年度よりオンライン投稿を推奨しております。

小川 令 先生(日本医科大学 形成外科)

「Regeneration of hair and other skin appendages: A microenvironment-centric view」

P.759～766

デファ アリサンディ 先生(金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻 臨床実践看護学講座)

大江 真琴 先生(東京大学大学院医学系研究科 アドバンスナーシングテクノロジー)

松本 勝 先生(金沢大学医薬保健研究域保健学系)

大貝 和裕 先生(金沢大学医薬保健研究域 附属健康増進科学センター)

仲上 豪二郎 先生(東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 創傷看護学分野)

真田 弘美 先生(東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 老年看護学/創傷看護学分野)

須釜 淳子 先生(金沢大学医薬保健研究域 保健学系臨床実践看護学講座)

「Evaluation of validity of the new diabetic foot ulcer assessment scale in Indonesia」

P.876～884